

輸入衣料品の染色堅牢度—その2

小見山 二郎、○勢畑 章子、関口 彩香

(実践女大)

【目的】現在国内で販売される衣料の68%は輸入品である。消費者の立場からは、それらの品質を客観的に評価することが望ましい。染色堅牢度は衣類に対するクレームのうち最多の項目であるので、昨年の報告に続いて本報では実際に市場で大量販売されている衣類を購入し、洗濯、日光、摩擦堅牢度を調べた結果を報告する。また洗濯による色落ち及び光照射による染料分解と色差の間の経験的な関係を指摘し、衣料品の変退色が起こる要因を考える。

【実験】大量販売されている衣料品を購入し、上記の堅牢度を常法に従って調べた。洗濯温度は40、70°C。ガードナー社製色差計で色差を測定した。目測による変退色の等級付けも行った。

【結果】ユニクロ他で購入した衣類を蛍光増白剤を含まない市販洗剤で洗濯した。目視による等級付けは信頼できなかつたので、 ΔE 値から等級付けを行った。洗濯堅牢度は全般に良好だったが、移染が見られるものもあった。今回のサンプルは洗濯により濃色化したものが多かった。衣類の縮みがその主な要因であった。摩擦堅牢度、特に湿潤時の移染に問題のあるものが過半数を占めた。前報と同様に ΔE と $\{1 - (K/S)r\} (x)$ (洗濯、光照射による染料の脱離、分解の割合) の関係を見ると $\Delta E = ax^2 + b$ の関係が成立した。この関係は濃色化の場合にも成立する。しかしこの関係に従わない変退色もあり、用いられた染料の性質との関係をより詳しく調べる必要がある。衣類の変退色は、素材、染料、染色法および後処理、洗濯他の使用条件に起因する。前報の結果も含めて、変退色の主因を考える。